

氏名	黒沼 太一 <small>くろぬま たいち</small>
学位の種類	博士（考古学）
学位記番号	人博 第 143 号
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 6 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題名	紀元前 4 千年紀ナカダ文化墓制から見た先史社会構造の検討：エジプト・ナカダ遺跡の事例研究
論文審査委員	主査 教授 山田 昌久 委員 准教授 出穂 雅実 委員 准教授 高橋 亮介

【論文の内容の要旨】

1. 本論文の目的

本論文は、紀元前 4 千年紀にアフリカ大陸北東部のナイル河下流域（今日のエジプト・アラブ共和国）に存続したナカダ（Naqada）文化期を対象に、その時代の中核的な遺跡だったナカダ遺跡の墓地資料を公刊・未公刊の双方の記録を用いて検討し、当時の社会に存在した階層などの地位に関する社会構造の程度を明らかにする。そして特に社会の階層化の過程を検討し、同時代の別の中心地遺跡と比較してナカダ文化期にナカダ遺跡が果たした役割を推察し、その発展と衰退の時期を捉える。これらの過程を踏まえ、人類史で数少ない最初期の国家体制の誕生に至った国家形成期であるこの時期に、ナカダ遺跡がいかに位置付けられるかを再評価することを目的とする。

2. 本論文の構成と目次

2.1. 構成

本論文は全 11 章から構成され、内容は第 1 章、第 2-5 章、第 6-10 章、第 11 章に分けられる。まず第 1 章では、ナカダ文化期の墓地研究の現状を記し、本論文で下敷きにする国家形成に向けた有力政体の消長を示した競合理論の概要を示して社会の階層化を検討する意義を指摘するとともに、分析の対象や目的について概要を記述する。また地域名や時代名の設定、本論文の構成も示す。

第 2 章から第 5 章では、本研究で前提となる情報を提示する。まず第 2 章では、研究の前提となる土器型式と相対編年・絶対年代の概要を示す。第 3 章では、埋葬に関する先行研究を取り扱い、考古の解明を目指した事例を中心に記述し、ナカダ遺跡における階層化を明らかにするための着眼点も設定する。第 4 章では、対象のナカダ遺跡における調査史

の概要を記述し、周辺の遺跡や地理的環境についても記述する。第 5 章では、本分析で対象とする資料を設定し、方法を示す。特に本分析で主要なデータの出典元となるナカダ遺跡調査者による未公開記録の特徴を示すとともに、分析の基本となる墓地から抽出した情報のカテゴリーである 9 種類の埋葬属性（以下、属性）の概要を記述する。

第 6 章から第 10 章では、属性やそのほかの着眼点を踏まえてナカダ遺跡における階層化を検討する。第 6 章と第 7 章では第 5 章で規定した属性に基づいて定量的な分析を行う。第 6 章では属性をそれぞれ個別に検討して各属性の特徴を通時的に把握するとともに、得られた結果に基づいて墓地を序列化する。第 7 章では、属性のうち特に副葬品の総点数と種類数、および墓の規模を対象に k-means 法によるクラスター分析を実施して各墓地における墓の差異を把握し、クラスターに基づいて序列化する。第 8 章と第 9 章では定性的な分析を実施する。第 8 章では、入手に労力がかかる希少品に着眼し、それらが出土した墓と第 7 章で得られた上位のクラスターを構成する墓との対応を検討する。その上で上位の階層の人々による希少品の占有の有無を検討する。第 9 章では、墓の墓地内での位置に着眼し、第 7 章で得られた上位のクラスターを構成する墓の位置を調査する。その上で上位の階層の人々による墓地空間の占有の有無を検討する。第 10 章ではそれまでの章で得られた結果を踏まえつつほかの中心地遺跡との比較分析を行う。

第 11 章では、第 10 章までの分析から得られた結果と解釈をまとめ、ナカダ遺跡を残した集団で生じた階層化とナカダ文化期におけるナカダ遺跡の興隆と衰退の時期や原因を確認するとともに本論文に関連する今後の課題を指摘する。

2.2. 目次

本論文の目次は以下の通りである。

1. はじめに

1.1. 紀元前 4 千年紀のナイル河下流域とナカダ文化の研究

1.2. 研究の視点と目的

2. ナカダ文化期の土器分類、および相対編年・絶対年代

2.1. 土器の分類

2.2. 相対編年

2.3. 絶対年代

2.4. まとめ

3. 研究史：社会構造の埋葬考古学的研究

3.1. 考古学一般における墓地資料を用いた社会構造の研究史

3.2. ナカダ文化墓制に関わる先行研究の概要

3.3. 分析の目的と着眼点の設定

4. ナカダ遺跡とナカダ地域の概要

- 4.1. ナカダ遺跡の地理的環境
- 4.2. ナカダ遺跡における調査史
- 4.3. ナカダ遺跡周辺遺跡での考古学的調査
- 4.4. ナカダ地域とその周辺の考古遺跡のまとめ
5. 資料と方法
- 5.1. 資料：ナカダ遺跡出土資料の基本情報
- 5.2. 方法
6. ナカダ遺跡から得られる埋葬属性の通時的分析
- 6.1. はじめに
- 6.2. 遺構としての墓に関する属性の分析
- 6.3. 出土遺体に関する属性の分析
- 6.4. 埋葬様式に関する属性の分析
- 6.5. 副葬品に関する属性の定量的な分析
- 6.6. ナカダ遺跡から得られる埋葬属性の通時的分析のまとめ
7. クラスタ分析
- 7.1. 分析結果
- 7.2. まとめ：クラスタ分析から見たナカダ遺跡の社会構造の複雑化と単純化
8. 希少品とクラスタとの関連性の検討
- 8.1. 希少品の定義と種類
- 8.2. 希少品の概要
- 8.3. 資料と方法
- 8.4. 分析結果
- 8.5. ナカダ遺跡における希少品と上エジプトにおける供給
- 8.6. まとめ
9. 上位クラスタ構成墓の空間的分析
- 9.1. はじめに
- 9.2. 墓地の空間的分析に関する先行研究
- 9.3. ナカダ遺跡の各墓地の拡大過程
- 9.4. 各墓地における上位クラスタ構成墓の分布
- 9.5. ナカダ遺跡各墓地における上位クラスタ墓の分布のまとめ
10. ナカダ文化期におけるナカダ遺跡
- 10.1. ヒエラコンポリス遺跡の概要
- 10.2. アビュドス遺跡の概要
- 10.3. ナカダ遺跡・ヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡の同時代的比較
- 10.4. ヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡と比較した際のナカダ遺跡の特色
11. 結論

- 11.1. まとめ
- 11.2. 今後の課題
- 11.3. 結語

3. 本論文の概要

以下に本論文の内容を要約する。

3.1. 「1. はじめに」

3.1.1. 紀元前4千年紀のナイル河下流域とナカダ文化の研究の意義

ナイル河下流域では、紀元前4千年紀に世界史で最初期の国家の1つである第1王朝が成立したために国家形成期とも称され、人類社会がそれまでにない複雑な構造へと変化した。この時期には、社会の階層化と王の出現、都市化、専門化、文字の発明と使用など、社会の構成員を効率的に運用して集団としての活動を推進する仕組みが出来上がった。したがって、これらの仕組みの出現と発達の過程を把握することがナカダ文化の考古学的研究で重要視されてきた。特に階層化などの社会構造の変化を把握することは最も重要で、20世紀中盤までに行われた墓地遺跡の調査成果が研究されたが、近年の新規の発掘調査により従来よりも早い階層化が提起された。初期の発掘調査の再評価と新規の発掘調査で得られた知見を組み合わせれば、階層化の研究に少なからず貢献できると期待できる。

ナカダ文化期には、ナイル河下流域沿いに存在した複数の地域の中心に当たる有力な遺跡が競合関係にあり、勢力圏の拡大と併合を繰り返して最終的にナイル河流域が政治的に統合されたとされる。ところが、有力な遺跡である中心地遺跡の多くは初期に発掘調査されたため、成果の多くが未公刊または不完全である。現存の記録の組み合わせた分析で、階層化の検討に重要な中心地遺跡での社会構造の変化を推定でき、ある中心地遺跡の興隆と衰退を競合の過程の中で推定できると見込まれる。単なる中心-周縁的な思考の枠組みを越え出て、国家形成の過程から脱落した遺跡の立ち位置を提示できると期待できる。

3.1.2. 研究の視点と方法

本論文では、階層などの社会的地位の差異を把握するために有効な墓地から得られる属性の定量的な分析と、遺物や遺構の配置などの定性的な分析を組み合わせる。階層化は考古学的証拠の様々な面に変化をもたらし、特に墓地に関しては遺物と遺構の両面に影響を及ぼすと見込まれる。したがって属性の詳細な検討から変化を捉えることができれば、階層化に関する推論が可能になると思われる。中でも社会構造が変動する時期や過程の面でのトレースが可能になると見込まれる。ただし、属性の検討に変化が確認できても必ずしも階層化による影響とは限らないので、推論の確度を上げるため、属性の個別的な分析に加えて最も階層と関わりが深い属性を組み合わせる定量的に検討するとともに、遺物の占有や墓の偏在を検討して、ナカダ遺跡における階層化を検討する。

3.1.3. 分析対象

以上に示したナカダ文化期研究の意義や、階層化の研究の重要性、初期の発掘調査の再評価の必要性、中心地遺跡の分析と相対化の有効性を踏まえ、本研究では上エジプト地域の今日のルクソール市の北 25 km ほどに所在するナカダ遺跡を対象とする。特に大墓地東地区、同西地区、同南地区、T 墓地、B 墓地の 5 ヶ所における階層化を検討して、ナカダ遺跡の興隆と衰退を議論する。また、分析で得られた結果を踏まえ、別の中心地遺跡であるヒエラコンポリス遺跡とアビュドス遺跡で近年の新規の発掘調査で得られた知見と比較検討することでナカダ遺跡を相対化し、ナカダ文化期におけるナカダ遺跡の立ち位置を判断する。

3.2. 「2. ナカダ文化期の土器分類、および相対編年・絶対年代」

上エジプト地域に存在するナカダ文化期の遺跡は一般に堆積に恵まれないため、遺物の型式分類による相対編年の構築が重要である。土器の型式分類の概要を記し、本論文で採用する相対編年の枠組みを提示し、放射性炭素 14 年代による絶対年代についても提示した。土器型式は、ナカダ遺跡の調査者が考案した分類に準拠し、近年の調査されたアビュドス遺跡で組まれたアビュドス編年を基本に相対編年の枠組みを定めた。この相対編年は、Ia1・Ia2・Ia3・Ib1・Ib2・I/II 前半・I/II 後半・IIa1・IIa2・IIb・IIIa1・IIIa2・IIIb・IIIc の合計で 14 の細分段階からなるが、通時的な傾向の把握を円滑化するため Ia1-Ia3・Ib1-Ib2・IIa1-IIa2・IIb・IIIa1-IIIa2・IIIb・IIIc の 7 つの「基本段階」にまとめた。各墓の時期はこの枠組み則って定め、分析はこの基本段階を単位に実施した。合わせて絶対年代に基づく各基本段階の年代観として近年のベイズ統計を用いた値を参照し、各基本段階の校正年代は、Ia1-Ia3 段階～Ib1-Ib2 段階は紀元前 3800/3750–3450 年、IIa1-IIa2 段階～IIb 段階は紀元前 3450–3325 年、IIIa1-IIIa2 段階～IIIb 段階は紀元前 3325–3085 年、IIIc 段階は紀元前 3085 年以降とした。

3.3. 「3. 研究史：社会構造の埋葬考古学的研究」

本章では、本論文で実施する階層化の過程を把握するための着眼点の措定するため、考古学一般における理論的研究と、ナカダ文化の墓地研究の双方で、墓地から被葬者の社会的地位の把握を試みた先行研究をまとめた。考古学一般における理論的研究では、民族事例をもとにした墓地研究の成果を瞥見した。先行研究は、特に被葬者の階層などの地位の違いが墓地から看取りやすく、墓に納められる副葬品の種類や量、墓の規模や複雑さに反映される点を指摘した。加えてある資源を占有している集団は、血縁などの系統を背景に墓地空間を占有する場合は非常に多いことを指摘した。

一方で、ナカダ文化の墓地研究では、文献資料ですでに王の出現という階級化の到達点を示されていたため、上記した理論的研究の成果をあまり踏まえておらず、王朝時代の研究などで重要視されていた副葬品の量や墓の構造などの面に着眼して階層化が議論されてきた。したがって理論的研究の成果をいっそう踏まえた着眼点の導入が必要である。本論

文では、被葬者の地位を示す副葬品と墓の規模の定量的な変遷、墓地の形成と発展の過程に着眼し、これらがナカダ遺跡で被葬者の社会的地位を区別する指標として有効か否かを検討した。

3.4. 「4. ナカダ遺跡とナカダ地域の概要」

分析対象のナカダ遺跡の概要を記述し、周辺の遺跡や地理的環境なども記載した。ナカダ遺跡はナイル河西岸に所在し、氾濫原沿いの低位砂漠に存在する。少なくとも墓地 7 ヶ所、集落 2 ヶ所が存在するが、本論文で対象とする 5 ヶ所の墓地は 1894-5 年に発掘調査された。上記した対象の墓地のうち、B 墓地は Kh.4 を、そのほかの 4 ヶ所の墓地はサウスタウンをそれぞれ母集落とする。また、ナカダ遺跡を中核とするナカダ地域ではこの他に少なくとも 15 ヶ所ナカダ文化期の遺跡が確認され、活発な活動が確認できる地域である。また、地理的にはナイル河東岸の東部砂漠を経由して紅海へと続くワディ・ハママートの入り口がナカダ遺跡の対岸に位置しており、人やモノの動きが東方面へと分岐する場所と言える。

3.5. 「5. 資料と方法」

分析対象となる 5 ヶ所の墓地で発掘された墓の数は、大墓地東地区 1312 基、同西地区 548 基、同南地区 54 基、T 墓地 57 基、B 墓地 135 基である。それぞれの利用期間を基本段階で示すと、大墓地東地区 Ia1-Ia3~IIIb 段階、同西地区 Ia1-Ia3~IIIc 段階、同南地区 Ib1-Ib2~IIIa1-IIIa2 段階、T 墓地 Ib1-Ib2~IIIb 段階、B 墓地 Ia2~IIIb 段階となる。分析に備え、公刊記録と未公刊記録から得られる情報を属性に整理し、「I. 相対年代」、「II. 墓の規模 (m²)」、「III. 墓の平面形状」、「IV. 墓の構造」、「V. 被葬者の人数」、「VI. 被葬者の性別と年齢」、「VII. 埋葬様式」、「VIII. 各墓から出土した副葬品総点数」、「IX. 各墓から出土した副葬品種類数」の 9 つの属性を設定した。ただしこれらは記録の残存状況などにより、欠落している場合もあるため、各属性の分析の際には対象となる資料のサイズを明記した。

また「I. 相対年代」以外の各属性には次の設定を定めた。「II. 墓の規模」は面積 (m²) を算出した。「III. 墓の平面形状」は、「長方形・隅丸長方形」、「楕円形・円形」、「そのほか」に分けた。「IV. 墓の構造」は「単純土坑墓」、「ステップ墓」、「接続・複合墓」、「日乾レンガ使用墓」に分けた。「V. 被葬者の人数」は、「1 人」、「2 人」、「3 人」、「4 人以上」に分けた。「VI. 被葬者の性別と年齢」のうち、性別は「男性」・「女性」・「性別不明」・「未測定のため情報不明」の 4 つに分け、年齢は記録上の問題から便宜的に第二次性徴期以降を「成人」、それ以前を「子ども」に大別した。「VII. 埋葬様式」は、「一次葬」・「改葬」・「追加埋葬」に分けた。「VIII. 各墓から出土した副葬品総点数」は、1. 「それ自体で完結する遺物」、と 2. 「複数の構成物からなる遺物」、の 2 種に分け、特に後者の場合はビーズなどを 1 単位として数えた。「IX. 各墓から出土した副葬品種類数は、7 種類（「土器」、「石製容器」、「パレット」、「石器」、「ビーズ・ペンダント」、「骨・牙製品」、「そのほか」）に分けた。土器は

「壺・甕」・「坏・鉢」・「W 土器」・「装飾土器」に細分し、骨・牙製品は「骨・牙製品 1 類」・「骨・牙製品 2 類」・「骨・牙製品 3 類」に細分して合計で 12 細分種類に区分した。

方法は上記の通り定量的分析と定性的分析を行った。定量的分析では、各属性の単独分析の場合、「II. 墓の規模 (m²)」、「VIII. 各墓から出土した副葬品総点数」、「IX. 各墓から出土した副葬品種類数」は、各基本段階での属性の平均値を算出し、加えてバラツキを把握するために最大値・最小値を提示し、標準偏差の一種である不偏分散の平方根を算出して差異の大小の通時的な看取を試みた (第 6 章)。また「III. 墓の平面形状」、「IV. 墓の構造」、「V. 被葬者の人数」、「VI. 被葬者の性別と年齢」、「VII. 埋葬様式」は、数と割合から通時的に傾向を看取した。クラスター分析は k-means 法を採用し、「II. 墓の規模 (m²)」、「VIII. 各墓から出土した副葬品総点数」、「IX. 各墓から出土した副葬品種類数」を対象に墓を区分してまとまりごとに序列化した (第 7 章)。定性的分析では、希少品の出土墓と第 7 章で得た上位クラスター構成墓の対応を検討し (第 8 章)、上位クラスター構成墓と墓地空間上のそれらの所在地の偏在を確認した (第 9 章)。どちらも「I. 相対年代」で規定した基本段階に則った。

3.6. 「6. ナカダ遺跡から得られる埋葬属性の通時的分析」

第 5 章で規定した 9 つの属性のうち、「I. 相対年代」を除いた 8 つの属性を、「遺構としての墓に関する属性」・「出土遺体に関する属性」・「埋葬様式に関する属性」・「副葬品に関する属性」の 4 つに大きく分け、「II. 墓の規模 (m²) と III. 墓の平面形状、IV. 墓の構造」、「V. 被葬者の人数と VI. 被葬者の性別と年齢」、「VII. 埋葬様式」、「VIII. 各墓から出土した副葬品総点数と IX. 各墓から出土した副葬品種類数」が該当させて検討する。そして得られた各属性の分析結果を踏まえて、5 ヶ所の墓地を序列化する。

3.6.1. 遺構としての墓に関する属性の分析

● 墓の規模 (m²) の分析

該当する情報が得られた 759 基 (内訳、大墓地東地区 447 基、大墓地西地区 166 基、大墓地南地区 39 基、T 墓地 35 基、B 墓地 72 基) の墓を対象とした。

全墓地の平均面積

平均面積は大墓地東地区 (2.00 m²)、B 墓地 (2.15 m²)、大墓地南地区 (2.67 m²)、大墓地西地区 (2.73 m²)、T 墓地 (4.16 m²) の順番に大きくなった。また、箱ひげ図の検討の結果、B 墓地を除いた 4 ヶ所の墓地では、上位 25%の墓の規模のばらつきが大きいことも読み取れた。ただし、大墓地東地区では最も大きい 11.61m²の規模を持つ墓以外の上位 25%を占める墓の面積は 5.499 m²までの範囲に収まった。一方で、T 墓地では上位 25%を占める墓の規模は事例によって大きくばらついた。大墓地西地区や南地区では、一部に規模の大きな墓は存在するが、大墓地東地区ほど顕著に大きな墓は存在しなかった。

各墓地における墓の面積の通時的検討

通時的には、大墓地東地区や同西地区では墓の面積に大きな変化が見られなかった一方で、同南地区ではⅡb段階に墓の規模がやや上昇することが読み取れた。T墓地とB墓地では特徴的な変化が確認できた。T墓地では利用開始期のIb1-Ib2段階に該当する2つの墓のどちらもが7-8 m²近い規模を持ち、次のⅡa1-Ⅱa2段階以降はより大きな墓が造営された一方で、より小さな墓も現れ、全体的には造営される墓の規模が時代を降るごとに概ね縮小した。B墓地では利用期間が終了するⅡb段階まで通時的に墓の平均面積が増大したが、各墓の面積のばらつきは大きくならなかった。

- 墓の平面形状の分析

該当する情報が得られた961基（内訳は、大墓地東地区601基、大墓地西地区167基、大墓地南地区51基、T墓地51基、B墓地91基）の墓を対象とした。

全墓地における平面形状別の墓数とその割合

どの墓地でも長方形の墓が多数を占めることがわかった。楕円形の墓に関しては、大墓地東地区では割合が全体の1/4程度になるのに対して、ほかの墓地では20%に満たなかった。特にT墓地では1基のみである。B墓地でも確認できた事例は5基に留まった。

各墓地における墓の形状の通時的な検討

概ね通時的に長方形の墓が多数を占めた。墓地によって特徴に差異があり、例えば大墓地東地区ではIa1-Ia3段階に長方形と楕円形の墓がほぼ同じ割合なことも示すことができた。大墓地東地区と西地区とでは、同一集落を母体しても墓の形状の傾向に違いが確認できたが、この背景には被葬者の地位などの別の要因が関わっていた可能性がある。

- 墓の構造の分析

大墓地東地区490基、大墓地西地区162基、大墓地南地区45基、T墓地48基、B墓地83基の墓を対象とした。

ステップ墓と接続・複合墓は大墓地南地区とT墓地以外の全ての墓地で確認でき、日乾レンガ使用墓は大墓地東地区・同西地区・T墓地で確認できた。最も際立ったのはT墓地で、日乾レンガ使用墓が全体の10%を占めるほかは単純土坑墓で、ほかの2種類の構造は確認できなかった。一方で大墓地の3墓地では日乾レンガ使用墓は4基しかなかった。

構造別の通時的な特徴は以下の通りである。ステップ墓はIa1-Ia3段階には造営されず、Ib1-Ib2段階から散発的に造営され、主におそらくⅡa1-Ⅱa2段階に多く造営されたと推定された。接続・複合墓は通時的に極めて稀で、2-3基程度が確認できるだけで継続して造営されるということがわかった。日乾レンガ使用墓はⅡa1-Ⅱa2段階以降に散発的に造営されたことがわかった。日乾レンガ使用墓は特にT墓地で大きい割合を占めた。T墓地における日乾レンガを用いた墓は、多くが内壁を有する部屋構造を持ち、Ib2-Ⅱa2段階の時期における有力者の墓である可能性が高いことがわかった。

3.6.2. 出土遺体に関する属性の分析

- 墓1基あたりの被葬者の人数の分析

単葬墓に対する合葬墓の割合を観察した。被葬者の人数に関する情報が得られた 965 基の墓（内訳、大墓地東地区 588 基、同西地区 190 基、同南地区 48 基、T 墓地 42 基、B 墓地 97 基）を対象とした。このうち、大墓地南地区では合葬墓を全く確認できなかった。単葬墓に対する合葬墓の割合は、大墓地東地区は 7.82 %、同西地区は 9.47 %なのに対し、T 墓地は 16.67 %、B 墓地は 14.43 %と若干高かった。T 墓地と B 墓地は構成墓数が大墓地東地区や同西地区よりも少ないにもかかわらず、合葬墓の数が多かった。

合葬墓の具体的な段階別の数は、大墓地西地区を除いて概ね Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に合葬墓が多く造営されることが窺えた。大墓地西地区ではこの時期に加えて、IIIa1-IIIa2 段階や IIIb 段階でも 1-2 基の造営が確認できた。各墓地では概ね合葬墓が造営される時期の傾向に共通性が見られるとともに、各墓地独自の細かな特徴として大墓地東地区では墓地利用の初期から合葬墓の造営がある程度あったことと、大墓地西地区に関しては造営される時期の長さの点ではほかの時期とはやや異なることが確認できた。

合葬墓に葬られた遺体数の種類に関する分析

墓から発見された遺体を人数別に分類した結果、2 人埋葬がどの墓地でも最多だった。一方で 3 人以上の埋葬も少数あり、最大で 7 人埋葬が見られた。大墓地東地区、同西地区および B 墓地では、1 つの墓に葬られる遺体の数が増えれば墓の数は減ることが読み取れたが、T 墓地は 6 人以上が葬られた墓が多いのが特徴だった。B 墓地には 5 人以上の遺体が埋葬された合葬墓はないが、それ以外では大墓地東地区に次いで種類が多いことが特徴だった。

- 被葬者の性別と年齢の分析

被葬者の合計 1121 人（内訳、大墓地東地区 667 人、大墓地西地区 216 人、大墓地南地区 50 人、T 墓地 68 人、B 墓地 120 人）を対象とした。

性別は、大墓地東地区・T 墓地・B 墓地では男性よりも女性の比率が高かった。一方で大墓地西地区と同南地区では男性の方が多いが差は顕著ではなかった。

死者数からは、大墓地東地区・同西地区で Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階にも多くの被葬者が確認できることから、この期間に多墓地利用が盛んだったことと推定できた。Ib1-Ib2 段階以降は、大墓地南地区や T 墓地も利用が開始され、サウスタウンから死者が多く出たことがわかった。一方で母集落が別の B 墓地でもこの期間の遺体が多かった。

被葬者の年齢に関しては特に子どもは 28 人分が鑑定されたのみで、墓地別の内訳は大墓地東地区 22 人、同西地区 2 人、T 墓地 1 人、B 墓地 3 人だった。このうち 15 人が合葬墓から検出された。以上から被葬者の性別と年齢に関しては確実な言及は難しかった。

3.6.3. 埋葬様式に関する属性の分析

- 埋葬様式に関する検討

ナカダ遺跡の埋葬様式は一次葬がほとんどなため、例外的な事例を中心に検討した。一次葬以外で得られた例外的な埋葬様式は9基のみでフィールドノートで確認できる965基の墓のうちの1%弱だった。例外的な埋葬様式の造営はナカダ遺跡では極めて限定的で、確認できたのは大墓地東地区とT墓地のみで、大墓地東地区では改葬墓のみが3基確認できた。T墓地では改葬墓と追加埋葬墓の両方が確認でき、それぞれ2基と4基確認できた。これらの時期は、改葬墓はナカダ文化期中盤初期から半ばなのに対し、追加埋葬墓は中盤半ばから後半に限定された。墓地の考古学的研究一般では、葬送儀礼は参画することで社会の共同体意識を確認し高める役割があり、その一環として参画者に視覚的に注目される遺構の配置をとる場合がある点が指摘されており、改葬墓は儀礼の場としての機能を持っていた可能性が指摘できる。一方で、追加埋葬墓は構造上の特徴から被葬者の系統が重要であり、高位の社会階層の被葬者によって占有された可能性が指摘できた。

遺体の加工に関する検討

遺体の加工には、遺骨への彫り込み (bone incision) や、二次的な遺骨の埋葬、遺骨の関節外しや遺骨の移動、遺骨の除去が先行研究で挙げられた。特に遺骨の除去に関しては、近年の精密な発掘調査で頸部の切断行為などが議論されたが、本研究のように調査記録に依拠した場合には検討しがたい。そこで検討可能な事例として頸部切断に着眼し、遺存状況が良いのにも関わらず頭部が欠損した事例を集成し、28基が得られた。墓地別の内訳は、大墓地東地区6基、大墓地西地区8基、大墓地南地区2基、B墓地12基である。T墓地では確認できなかった。ここから、事例は少ないが、ある程度の数の遺体が原状変更を受けていた可能性が読み取れた。この背後の葬送観念として、ほかの遺跡での解釈から、遺体の毀損は社会的制裁の意味がある可能性を推察した。これはナカダ文化期の葬送観念では、逆に体が完全であることが元来は重要性だったことの傍証の可能性と考えた。

3.6.4. 副葬品に関する属性の定量的な分析

1023基の墓から出土した9433点の副葬品を対象にした。墓地別の墓数は、大墓地東地区633基、大墓地西地区226基、大墓地南地区48基、T墓地48基、B墓地68基である。

● 副葬品の総点数の分析

各墓地の副葬品の総点数の平均は、B墓地6.85点、大墓地東地区7.76点、大墓地西地区11.52点、大墓地南地区12.58点、T墓地15.27点の順番に大きくなることがわかった。一方で、各墓地を構成する墓に納められた副葬品の総点数に見られる差異の大きさから得られる様相はこの副葬品の総点数の平均とは異なった。大墓地東地区は全般的に納められる副葬品が少ない一方、大墓地南地区とT墓地は納められる副葬品が全般的に多かった。B墓地は平均すると総点数は少ないが、その内実は墓ごとに大きく異なった。大墓地西地区も総点数が墓によって大きく異なり、極端に総点数が多い墓も存在した。

各墓地の副葬品の総点数に関する傾向は以下の通りである。まず大墓地東地区では、長

い利用期間の中で極端に墓の間に納められる副葬品に差異がつく段階は認められなかった。各段階にごく少数の多量の副葬品を有する墓がある一方で、大多数の墓は副葬品の点数が少なかったことが読み取れた。大墓地西地区では、各段階に少数ながら多量の副葬品を有する墓がある一方で、大多数の墓にも一定数の副葬品が納められたことが読み取れた。大墓地南地区では、納められる副葬品の総点数にある程度の差異があり、なおかつ全体的に納められる総点数が多かった。T 墓地では、利用開始当初の Ib1-Ib2 段階から大量の副葬品が墓に納められた一方で総点数の差異自体はあまりなく、時代が降るにつれて納められる副葬品の点数が減り、差異自体もやや小さくなった。B 墓地では、利用開始当初の Ia1-Ia2 段階から副葬品の総点数が上がった一方、差異自体は一定の水準で通時的に維持された。

- 副葬品の種類数の分析

各墓地の副葬品の総点数の平均は、B 墓地 2.18 種類、大墓地西地区 2.99 種類、大墓地東地区 3.05 種類、大墓地南地区 3.38 種類、T 墓地 3.44 種類の順番に大きくなった。種類数の平均と変動係数から得られる墓地の様相をまとめると、大墓地東地区は、一部に多種類の副葬品を含む墓もあるが、基本的には 3 種類程度の副葬品が墓に納められる。大墓地西地区も類似するが、やや種類数が少ない。同南地区は T 墓地以外では平均的に多種類の副葬品が納められる事例が最も多い。T 墓地では平均して最も多種類の副葬品が納められる傾向にあるが、墓地内での差異は大墓地東地区や西地区と概ね同程度である。B 墓地は、対象の墓地遺跡の中では最も平均的に納められる副葬品の種類が乏しいが、墓によって差異は大きい。

以上の各属性の単独分析の結果を総括して墓地を序列化した場合、概ね T 墓地→大墓地西地区⇌大墓地南地区→大墓地東地区(→)B 墓地となると解釈できた。B 墓地に関しては、属性によって序列上の立ち位置が異なるものの、特にサウスタウンを構成する 4 ヶ所の墓地には墓地ごとに属性に優劣が存在することが示された。

3.7. 「7. クラスタ分析」

「II. 墓の規模 (m²)」、「VIII. 各墓から出土した副葬品総点数」、「IX. 各墓から出土した副葬品種類数」を対象に非階層型クラスタ分析の 1 つである k-means 法を採用し、墓を区分してまとまりごとに序列化する。分析に適用可能な墓の数を可能な限り増やすため、VIII.、IX.を変数にしたクラスタ分析と、II.、VIII.、IX.を変数にしたクラスタ分析を 2 段階に分けて実施した。クラスタ分析の対象墓の数は、2 変数の場合は大墓地東地区 633 基、同西地区 226 基、同南地区 48 基、T 墓地 49 基、B 墓地 87 基、3 変数の場合は大墓地東地区 444 基、同西地区 162 基、同南地区 39 基、T 墓地 34 基、B 墓地 72 基である。

大墓地東地区と同西地区では、1. Ia1-Ia3 段階の時点で明確な差異が存在し、最上位のクラスタが明確である、2. Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階にかけて最も区分できるクラスタ

一の数が多い、3. この期間にも最上位のクラスターが明確に存在し、一方で顕著な差異はないが区分は可能な中間層が存在する、4. IIb 段階以降は最上位のクラスターの水準が低下して中間層の厚みも消滅し、墓地利用の停止に向かう、という結果が得られた。

大墓地南地区では、1. IIa1-IIa2 段階に最もクラスターの数が多い、2. この段階にはクラスター間に明確な差異が存在する、3. IIb 段階以降はクラスター数が著しく少なくなって墓地利用の停止に向かう、という結果が得られた。

T 墓地では、1. Ib1-Ib2 段階に全利用期間の中でも最も高水準の値を示す、2. IIa1-IIa2 段階に最も多くのクラスターに分割できる、3. この段階にはクラスター間に明確な差異が存在する、4. IIb 段階以降はクラスター数が著しく少なくなって墓地利用の停止に向かうがクラスター間の差異は顕著である、という結果が得られた。

B 墓地では、1. Ia2-Ia3 段階は差が顕著でない、2. Ib1-Ib2 段階から最も多くのクラスターに区分でき、同様の区分が IIa1-IIa2 段階まで続く、3. IIa1-IIa2 段階にはクラスター間で差異が特に明確になる、4. IIb 段階に急速に利用が停止する、という結果が得られた。

またどの墓地でも副葬品の総点数と墓の規模に概ね相関が見られた。

以上から、サウスタウンでは Ia1-Ia3 段階の時点ですでに階層が存在し、特に Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に階層に関わる社会構造が最も複雑化したことが読み取れた。これらの結果は、前章までで明らかになった Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階のサウスタウンにおける人口の急増と集落活動の活発化と整合的で、階層に関わる社会構造が複雑化したことが読み取れた。また、IIb 段階以降は集落活動の不活発化とともに社会構造の単純化が読み取れた。

3.8. 「8. 希少品とクラスターとの関連性の検討」

入手に労力がかかる物品や、製作に特殊な技術が必要な物品を希少品と定義し、この中に搬入品と精製品の2種類を含めた。この2種類は不可分なものもあるため一括して希少品として取り扱った。対象の希少品は、両面調整石器、石製容器、メイスヘッド、パレット、マラカイト、方鉛鉱、金、アメジスト、赤鉄鉱、柘榴石、凍石、玉髓類、カンラン石、サンゴ・海産貝、銀・鉛、銅、トルコ石、黒曜石、ラピスラズリ、円筒印章である。これらの希少品と第7章で区分して得られた上位クラスター構成墓との対応を検討した。

その結果、希少品の種類には出土する墓のクラスターのちがいがあり、金、銅、玉髓類、石製容器、黒曜石、円筒印章は概ねどの墓地でも被葬者の高位の社会的地位を示すシンボルとして利用されたことが想定できた。また墓地によっては方鉛鉱、赤鉄鉱、柘榴石、メイスヘッド、両面調整石器も高位の社会階層を示すシンボルだった可能性が読み取れた。一方で、マラカイト、凍石、ラピスラズリは概ね中間のクラスターを構成する墓から出土することが確認でき、中間層の社会的地位にある人々向けだったと想定された。さらに中間層のクラスターを構成する墓にも、上位クラスター構成墓から出土する希少品が部分的に納められていた。したがって、必ずしも特定の希少品が縦の社会的地位では上位の人々に占有されたのではなく、保有の有無はあくまで相対的で、絶対的な占有には至っていない

かったと考えた。また、サンゴまたは紅海産貝類・パレットは搬入が必要だが、特定の階層のシンボルには用いられない種類の希少品も読み取れた。希少品は、地位を表すシンボルとして機能する場合も逆もあり、特定の種類の保有に相対的な重要性が備わることが示された。またこれらの希少品は Ib1-Ib1 段階以後に特に種類や量が増加することから物流の活発化が示唆された。

3.9. 「9. 上位クラスター構成墓の空間的分析」

本章では、ナカダ遺跡で社会階層をもとに隔絶された墓域が出現する否かを検討するため、対象の 5 ヶ所の墓地における第 7 章で区分した上位クラスター構成墓の分布を観察してそれらの偏在の有無を確認した。上位クラスター構成墓は当該の基本段階の中間よりも上位のクラスターに属する墓が対象である。その結果、墓地ごとに様相は異なった。

大墓地東地区では Ia1-Ia3 段階には上位クラスター構成墓の偏在は認められなかったが、Ib1-Ib2 段階以降は墓地の西側で散漫な集中が認められ、IIb 段階まで造営が続いた。ただ別の箇所にも上位クラスター構成墓が確認できるため、完全な偏在はなかった。ここから墓の造営箇所に関する規制は強くないと考えられた。

大墓地西地区では Ia1-Ia3 段階から上位クラスターの偏在が認められ、概ね墓地中央部の西側に IIIb 段階まで所在した。また、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までは墓地東側でも少数が分布した。ここから上位クラスター構成墓は墓地中央部の西側に集中して造営され、最も墓地の利用が高まる Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には造営場所が分散した可能性が読み取れた。墓の造営箇所に関する規制はある程度存在したと考えられた。

大墓地南地区では利用が本格化する IIa1-IIa2 段階には、上位クラスター構成墓が墓地北側に偏在することが明確に認識できた。一方、IIb 段階や IIIa1-IIIa2 段階は墓自体の数が少なく、偏在の認識は難しかった。少なくとも IIa1-IIa2 段階には偏在が認められた。

T 墓地では、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階まで墓地の北側に偏在が確認できた。一方で、IIb 段階や IIIa1-IIIa2 段階は墓自体の数が少なく偏在の認識が難しかった。Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までの偏在の中には、改葬墓や日乾レンガ使用墓など T 墓地を特徴付ける埋葬様式や構造を持つ墓が存在する点も特徴だった。したがって Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には概ね適用できるが、そのほかの段階では不明なことがわかった。対象とした 5 ヶ所の墓地の中では最も顕著に上位クラスター構成墓の偏在が確認できた。

B 墓地では、墓地が南北の 2 つのまとまりに分けられ、上位クラスター構成墓は基本的に南北の両方に造営された。北側では、Ia2-Ia3 段階から IIb 段階まで北西側に上位クラスター構成墓の造営が見られ、南側では、特に Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階により南側部分で確認できた各段階の埋葬地のより外側に上位クラスター構成墓が緩やかにまとまることを読み取れた。ここから B 墓地では、上位クラスター構成墓の偏在が部分的に認められた。

以上から T 墓地を除けばいずれの墓地でも上位クラスター構成墓は緩やかな偏在に留まることが読み取れた。これは社会構造の複雑さに関わらず、墓地の一部における上位クラ

スター構成墓の空間的な占有は緩やかなもので、分布に反映される縦の社会的な差異は部分的なことがわかった。例外は T 墓地で、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には、明確な墓地の空間的占有の可能性が考えられた。第 6 章で提示したように T 墓地は属性別にみても最上位に序列化できる墓地だった。また大墓地西地区に見られるように、序列化でより上位に位置づけられた墓地では緩やかだが明確な上位クラスター構成墓のまとまりが確認できた。ここから、墓地の序列の高さは上位の被葬者を納める墓の分布が偏在化することと有意な関係にあると解釈でき、墓の空間的な用い方に強い規制が存在したと考えた。

3.1 0. 「10. ナカダ文化期におけるナカダ遺跡」

ナカダ遺跡と同じく有力な中心地遺跡だったヒエラコンポリス遺跡とアビュドス遺跡における階層化と関わる考古学的物証の同時代的な通時的に比較を実施し、上エジプト地域におけるナカダ遺跡の役割や立ち位置を考察した。

Ia1-Ia3 段階には 3 ヶ所の遺跡のうち、埋葬複合体などの特徴的な墓が検出されたヒエラコンポリス遺跡が最も顕著な特徴を持つ事例を持つ。ナカダ遺跡ではすでに階層の存在が考えられるが、ヒエラコンポリス遺跡にも明確な階層差が見られ、かつ墓地の占有や計画的な墓地空間の利用が著しかった。アビュドス遺跡はナカダ遺跡と類似した状況にあったと考えられる。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、ナカダ地域の中心地でだが、ヒエラコンポリス遺跡に比肩する規模でなかったと考えられた。

Ib1-Ib2 段階には、ナカダ遺跡で中間層の厚みが飛躍的に増加し、この段階に集落の活動が伸長し、社会構造が複雑化したことが推察された。大墓地南地区や T 墓地の利用が新たに開始され、T 墓地では改葬墓などの儀礼上の役割を有した可能性がある特殊な埋葬様式が見られた。ナカダ遺跡の活動が最も活発化した時期であり、最盛期と考えられる。ヒエラコンポリス遺跡では、この時期の初期にも継続して活発な墓地の造営活動が見られた。前段階に引き続き階層などの社会的地位によって墓地が分別されていたと考えられた。アビュドス遺跡では、前時期に引き続いて活発な墓地利用が確認できたが、造営された墓は基本的に単純土坑墓に留まった。この時期の後半から墓地利用は一旦低調になった。以上を総合すると、この時期 3 ヶ所の遺跡のうち、ナカダ遺跡の興隆が最も著しかったと考えられる。ナカダ遺跡では集落活動の活発化と人口の流入により階層が複雑化した。ヒエラコンポリス遺跡は、引き続き人口が多い水準にあったと考えられ、おそらく前時期からの階層構造自体は維持されたと考えられる。アビュドス遺跡は前段階よりも活動が低下したか概ね同規模を維持したと考えられる。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、ナカダ地域の中心地であり、より勢力が伸長したと考えられる。規模的にもヒエラコンポリス遺跡に比肩するようになったと考えられる。第 8 章で見たように、東部砂漠産の資源などの搬入品の種類や量が増加したのはこの時期であり、物流に関連した集落活動の伸長が想定できる。競合仮説では、この時期は、上エジプト地域のか

つての 5 ヶ所程度の中心地のうちアバディーヤが脱落するとされたが、東に接し、なおかつ諸資源の原産地に近いナカダが物流の主導権を握ったことでアバディーヤが弱体化されたとも捉えられる。この時期におけるナカダ遺跡の活動の伸長は著しく、上エジプト地域の中でもナカダ遺跡が重要性を持った段階と捉えられる。東部砂漠産の希少資源の物流がこの伸長の原動力だった可能性がある。

IIa1-IIb 段階にはナカダ遺跡では、IIa2 段階までは前段階に引き続いて大墓地東地区と同西地区の利用が活発な状態を概ね維持した。基本的に中間層の厚みは前時期から変わらず、墓の副葬品に見られる差異の構図も概ね維持された。墓地内における上位の序列にある墓の緩やかな空間的まとまりも大墓地東地区と同西地区では維持された。この段階には大墓地南地区の利用も本格化した。またこの時期の T 墓地では T15 号墓や T20 号墓など日乾レンガを使用した複室構造の墓が造営されるようになり、ナカダ遺跡における縦の社会的地位が高い人々が埋葬されるようになった。B 墓地でも前の時期から引き続いて墓の造営が継続され、多量・多種類の副葬品が墓に納められた。この時期の特に IIa2 段階まではナカダ遺跡の最盛期の後半と考えられる。この傾向は IIb 段階になるとどの墓地でも衰微の兆候が見られるようになった。ヒエラコンポリス遺跡では、複数の日乾レンガ使用墓が造営され、縦の社会的地位によって墓地がある程度分別されていたと考えられた。アビュドス遺跡では、U 墓地では Ib1-Ib2 段階最後からの低調な墓地利用が続いたものの、IIa1-IIa2 段階以降は再び墓地利用がやや活発化した。墓は基本的に単純土坑墓だが、精細な浮き彫りによる人物像を持つ象牙製のナイフ把手などの墓など副葬品の富裕さは II 期前半までと比べると全体的に高くなった。また新たな墓地の利用が開始され、社会的地位による墓地の区分が始まったと推定された。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、引き続きナカダ地域の中心地で、規模的にもヒエラコンポリス遺跡に比肩する状態を維持したと考えられるものの、IIb 段階には衰退期に入ったと考えられる。代わってアビュドス遺跡の伸長が見られるようになった。東部砂漠産の資源などの搬入品の種類は移り変わるものの、全体的には物流の量が増加したため引き続きナカダが物流の面で重要性を持っていたと考えられるが、IIb 段階にはこの構図は崩れ、アビュドス遺跡に主導権を取って代わられたと考えられる。ナカダ遺跡はこの時期の終盤に上エジプト地域の中で主体的に重要性を持つ立ち位置から転落したと捉えられる。

IIIa1-IIIa2~IIIc 段階には、ナカダ遺跡では IIb 段階からの流れを引きついで、墓地の利用が著しく退行した。各墓地は IIIa1 段階に大墓地南地区、IIIb 段階に同東墓地・T 墓地、IIIc1 段階に大墓地西地区の利用が停止された。中間層の厚みも通時的に縮小し、墓の副葬品に見られる大きな差異もなくなった。T 墓地などのかつての上位の社会的地位にあった人々の墓地でも、大きな差異はなくなった。IIa1-IIa2 段階に存在した日乾レンガ使用墓も造営されなくなる。また既存の墓地の利用が終了する一方で、集落に関しては規模を大きく縮小して活動自体は続いた。ヒエラコンポリス遺跡では、氾濫原に所在する集落址のネケンで、王権の成立に関わる様々な痕跡が確認されるようになった。アビュドス遺跡では、IIIa1-IIIb

段階の U 墓地で少数の墓が造営されたが、すべて日乾レンガを使用した複室構造の墓であり、最初期の王墓地となった。ほかにも氾濫原側で同時代の墓地が形成された。U 墓地は、IIIc 段階以降は第 1 王朝や第 2 王朝時代の王墓地となった。以上を総合すると、3ヶ所の遺跡のうち、ナカダ遺跡は完全に衰退し、アビュドス遺跡が最も力を持ったと考えられ、王墓地とその母体となった集落は王朝開始後のナカダ文化期において最も重要だったと考えられる。またヒエラコンポリス遺跡は、アビュドス遺跡について重要な遺跡だったと判断された。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、ナカダ地域の中心地だった可能性はあるが完全に衰退しており、東部砂漠産の資源などの単なる物流上の経由地に留まったと考えられる。IIIc 段階以降は、ナカダ文化の中心地はより北方の下エジプト地域へと展開したため、ナカダ遺跡の必然的にさらに辺境化したと考えられる。

3.1.1. 「11. 結論」

結論では、本論のまとめとして第 6 章から第 10 章までの分析と検討で得られた研究成果を整理し、墓地資料から得られたナカダ遺跡における階層化の過程を踏まえ、ナカダ遺跡が国家形成へと至る社会の変動の中でいかに位置付けられるかを再評価した。また本研究に関連した課題点についても述べた。

まず墓地資料からは、ナカダ遺跡を残した人々の社会では、副葬品の種類数に加えて総点数も被葬者の社会的地位を表すために重要で、墓の規模も重要だったことが読み取れた(第 7 章)。そしてこれらの属性に現れる差異の多様さは特に Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に最も顕著であり、この段階が最も社会構造が複雑な時期に当たることが推定された(第 6 章・第 7 章)。Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階にかけては、上位クラスター構成墓には希少品の優先的な分配や墓地空間の優先的な利用などの現象も見られるため、被葬者の地位の違いは副葬品や遺構としての墓(第 7 章・第 8 章)、墓地内の位置(第 9 章)など様々な点に反映されていたと考えられた。この地位の多様化は集落活動の活発化と密接に関連しており、特にナカダ遺跡はその立地上の特性から東部砂漠などで産出される希少資源の物流を管理する結節点の役割を持っていたことが集落活動の活発化に繋がったと考えられる。この証拠にナカダ遺跡では Ib1-Ib2 段階から希少品の種類が増えることが示された(第 8 章)。したがってナカダ遺跡における社会構造の複雑化は、主に物流面での経済的な活動の結果と捉えられ、ナカダ文化期中盤の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の立ち位置としては特に東部方面からの物流を掌握した要衝として機能したと考えられた。しかし、この構図はアビュドス遺跡にとって代われ、ナカダ遺跡は急速に勢力を低減させて辺境化したと考えられた(第 10 章)。

課題点として、遺物研究の組み込みと未公刊記録を用いた研究の限界点をあげた。

本論文では、未公刊記録から得られる数値などのデータに主に依拠してナカダ遺跡の社会における縦の社会構造の変化を検討してきたが、実資料の特徴をより詳細に反映した検

討できていない点が課題である。特に遺物研究も副葬品の差異を見い出すために重要な視点と言える。実資料の着眼点に関しては、製作技術や特定型式の墓地内における分布、原材料の分布などが挙げられる。例えば、製作技術の検討は、ナカダ遺跡におけるローカルな成型技術や製作者の特定などが可能になる見込まれるほか、国家形成過程の進展に伴う製作技術の変化も捉えることが可能になると予期される。また副葬品の原材料に関しては、これまで博物館によって見解や記載、用語が異なっており、統一できていない点が問題となった。実見による鑑別で、ナカダ遺跡における原材料の選択や流通といった点を実証的に検討することが可能になると思われる。遺物研究をさらに進展させて各資料の特徴が明らかになれば、副葬品の生産と消費という枠組みで、墓地資料の検討にさらに深みを持たせることが可能になると予想される。

また未公刊記録には限界がある点も課題としてあげられる。ノートなどの未公刊の記録を用いた研究は初期の調査の成果を整理し、それまで知られていなかった情報や解釈を付加できる点で意義を持つ。反面、調査者自身にしかわからない記録事項には、解釈が介入することとなり、完全に調査者が捉えた認識を追跡することは難しくなる。また多くの場合は手書きなため誤読の可能性も生じる。この影響を極力避けるためには、発掘者の筆跡を熟知する必要がある。また複数の記録が利用可能な場合、それらを相互参照することで散逸した部分の墓が持っていた情報を可能な限り回収・補うことができると考えられる。墓別土器型式一覧表のように、後代になって新たに記録が発見される場合もあるため、アーカイヴ記録の収集と綿密な内容の確認が求められ、未知の情報が付加できる可能性もある。したがって、未公刊記録の調査は新しい知見が得られる余地を有している。

現在のナカダ文化の研究で重要な点は、新規の発掘調査と博物館に収蔵された膨大な過去の発掘の記録の両方を調査して複合・関連づけていくことであり、どちらか一方に偏るのではなく、均衡して相互補完的に研究を進めていく必要があると考える。そのためにナカダ遺跡は重要な遺跡の 1 つであり現場から得られる新たな知見と習合してナカダ文化の研究を推進するための役割を担っていると考える。